

太田俊雄の宗教教育思想（４）

山 田 耕 太

1. はじめに

本稿に至るまでの「太田俊雄の宗教教育思想」を簡潔に振り返りたい。最初に、太田俊雄がアメリカ・シカゴ郊外のノースセントラル大学（North Central College）とエヴァンジェリカル・セオロジカル神学校（Evangelical Theological Seminary）での留学時代（1949-1952年）に学んだ宗教教育、とりわけホーレス・ブッシュネルとランドルフ・C. ミラーの宗教教育思想の核心を明らかにした。⁽¹⁾

次に、太田俊雄の英語教師時代（1935-1949年）に遡って、太田俊雄に多大な影響を与えた小原国芳、羽仁もと子、河井道の宗教教育思想と実践の要点を明らかにし、それらが大正リベラリズムの系譜に位置づけた。⁽²⁾

さらに前稿では、太田俊雄が英語教師となる以前の旧制中学時代（1925-1931年）に「私立岡山巖」⁽³⁾で出会い決定的な影響を受けた柴田俊太郎と柴田に多大な影響を与えた本間俊平の宗教教育の実践の一端を解明した。⁽⁴⁾

本稿では、前稿に引き続いて、太田俊雄がキリスト教の洗礼を受ける以前の精神的基盤に光をあて、私立中学岡山巖時代の藤井豁爾^{かつじ}校長と岡山巖のユニークな教育実践に光をあてて、その背後にある教育理念の淵源を掘り下げてみたい。すなわち、太田俊雄の宗教教育思想がキリスト教に「継ぎ木」される以前の「野生のオリーブの木」⁽⁵⁾について光をあててみたい。

2. 理想の校長 藤井豁爾

太田俊雄は岡山巖で出会った教師で「こういう教師になろう」と模範となり、かつ最も影響を受けた人物として、英語教師の柴田俊太郎と共に藤井豁爾校長の名前を挙げる。⁽⁶⁾ 藤井豁爾校長は、大学南校で英語を専攻した英学徒であり、自分の体験を通して得た処生訓を話すときにも、英語を合間に挟んで話していた。太田俊雄が入学した年には、5年生に後に東京外国語大学学長になった小川芳男がいた。小川芳男は中学5年の終わりに英語の特別授業として、藤井豁爾校長からチャールズ・ラムの『シェークスピア物語』を習ったが、太田俊雄は5年生の終わりに藤井校長からウィリアム・ハズリットの『エッセー』を学んだ。小川芳男はその発音が魅力的であったことを指摘するが、太田俊雄は、藤井校長が半頁位の英語一段落を朗読した後に、教科書を教卓の上に伏したままでその内容を全

部暗記して解説する姿に驚き感動した。⁽⁷⁾

小川芳男によれば藤井豁爾校長と岡山巒の教育方針は以下のように要約される。

「藤井校長は岡山県からただ一人の海軍大将になった藤井較一の弟で、真の教育は非行者や不幸な者を教育することであるという信念の持ち主で、実際生徒の中にはずいぶん乱暴者もいた。…とに角、岡山巒というのは、学問の追求だけを唯一の目的としない学校で、よきにつけ悪しきにつけ一本筋が通っていた。」⁽⁸⁾

藤井豁爾校長の人格教育は、日本ばかりでなく当時の台湾や朝鮮でも鳴り響いており、全校生徒200人足らずの岡山巒には台湾や朝鮮からの留学生も数十人在学していた。

太田俊雄は中学2年生の時に、前年11月に英語の教師として岡山巒に着任した柴田俊太郎と初めて出会ったが、柴田は中学5年の夏休みには実家の家業を継ぐという事情で鳥取に戻って行った。太田は「世には多くの先生といわれる人がいるが、真の教育家と言われる人物は少ない。…真の教育家といわれるにたる人物は極めて少ないが、藤井校長はたいしたものだ」⁽¹⁰⁾ という柴田の言葉に促されて、藤井校長と真の意味で出会ったのは、5年生の夏休み以後のことであった。とりわけ退学と復学という二つの出来事を通して、藤井校長の魂に触れる出会いを経験した。

3. 藤井豁爾校長との人格的出会い

太田俊雄は尊敬する柴田俊太郎が岡山巒を去った後に、学校に行く気がしなくなり、夏休みが終わり2学期が始まる2日前に、自転車で岡山市東田町の藤井校長宅に退学を申し出に行った。家の奥から和服姿で身を正して出てきた校長は太田の訴えを聞いた後に、後半年で卒業なので退学を翻そうとするが、太田の意志が固いを見て、柴田先生がいない学校には魅力がないのが真の理由であろうと問い質す。それに対して、太田は見透かされた真意をはぐらかすかのように、月謝が払えないことをその理由として挙げる。それに対して藤井校長は、寄宿舎の三人の「不良学生」の問題で舎監が手を焼いて辞表を出すに至り、舎監の辞表を受け入れるか学生を退舎させるかと、と困っている問題を切り出し、同期生の太田ならばうまく取り扱うことができるのではと思ひ、校長を助けてはくれまいかと迫った。そこまで懇願されて、太田は9月から舎監補佐として寄宿舎に住み込み、舎費、食費はもちろん授業料まで全額免除するという破格の取り扱いを受け入れて、学校に留まることになった。⁽¹¹⁾

太田俊雄は校長が望んだように次第に問題の「不良学生」たちを言葉によってではなく行ないによって善い方に導いていった。⁽¹²⁾ところが、11月になると、今度は太田が、酒乱癖で刀を振り回し、バクチ打ちの常習犯で遊郭通いの配属将校を排斥する運動のリーダーになって、生徒会で度々配属将校を糾弾していた。そして、決議文を書いて、生徒会代表

として太田は校長室で藤井校長に何回も迫った。

「あの大尉をやめさせて欲しい。あんな人物のいるのは岡山鬻の恥であり、あんな人物を教師陣に持つことは汚らわしい。」

「太田、目をつぶってくれ。君たちの言うことはいちいちもっともだ。よくわかる。だが、あれはわたしの手におえんのだ。たのむ。目をつぶってくれ。」

しかし、太田俊雄は11月29日の軍事講話の時間にその大尉と真正面から衝突して、汚れた学校にいつまでもいることはできないと学校を飛び出してしまった。退学の挨拶に校長室に行き、「太田、目をつぶってとどまってくれ。止めるんじゃない。このまま欠席しても十分に卒業出来るんだぞ。欠席してでもよいから学校に残れ」という藤井校長の言葉を振り切って退学してしまった。⁽¹³⁾

太田俊雄は姉をたよって京都に出て、三高入学を目指して勉強したが、無理がたたって病気になり、医師の助言に従って郷里に戻って三か月間療養することになった。その後、倉敷の文房具屋で住み込みの丁稚奉公をしていた。一年後の秋になると藤井校長から自宅に来るようにという手紙があり、出かけて行くと校長は「社会学は一年で切り上げてくれ。そして校長のふところにもう一度戻ってきてくれ」と太田の復学を迫った。太田は配属将校がまだいるので「いやです」と断ると、校長がハラハラと涙を流して訴えたので太田は校長の懇願に応じることにした。それに、校長は配属将校にも復校の挨拶をしてくれ、と難しい注文を付け加えたが、太田はそれに応じて復学し、無事に卒業することができた。

太田俊雄は一年遅れて参列した卒業式の直後に、老校長に面倒をかけたという後悔の思いと、卒業をさせてもらった感激と感謝の気持ちで黙って去るわけにもいかず、校長室に挨拶に行った。

「校長先生、卒業させて頂いてありがとうございました。」

「太田、よく卒業してくれました。校長はうれしい。礼を言いますぞ。」

藤井校長は校長室の大きなデスクから立ち上がり、両手で太田の手をとって涙ながらにそう言った。太田の手の甲には、校長の涙がポタポタと流れ落ちていた。⁽¹⁴⁾ こうして太田は藤井校長に二度も三度も懇願され、また校長に一度ならず二度も涙を流させたのであった。

「不良学生A」の後日談。太田俊雄が舎監補佐として善導したAは、漢文の恩師が戦災で被災した上に戦後の公職追放で困窮生活を強いられている時に訪れた数少ない卒業生であった。Aは恩師が馬引きとして生活できるようにと馬を持参して恩返しをした。そればかりでなく、太田のアメリカ留学壮行会にも顔を出し、その20年後に太田が敬和学園の校長になった頃には、太田に故郷の郡内の小中学校PTAで講演を依頼する教育長となっていた。⁽¹⁵⁾

「汚れた配属将校」の後日談。太田俊雄は岡山鬘卒業直後に徴兵検査に甲種合格して、岡山歩兵第10連隊に入営した。すぐに中隊長室に呼び出されて行ってみると、中隊長は岡山鬘で大喧嘩をして退学した配属将校X大尉の無二の親友であり、太田のことはX大尉からよく聞いていた。中隊長から「太田という奴は無類の硬骨漢じゃ。見所のある」というX大尉の意外な褒め言葉を聞かされて太田は驚いた。中隊長は入営2週間程して再び太田を呼び出して、「中隊長の一存で兵役を免除する。タマよけには惜しい。銃後であって、より良き奉公をせよ！」と言い渡した。その後、太田は法政大学夜間部で苦学して、念願の英語教師になっていく。後年になって太田は、あの配属将校と大喧嘩をしていなかったならば、確実に戦地で戦死していたと述懐する。⁽¹⁶⁾

太田俊雄が敬和学園高校校長時代に、「心の中にはいつもあのような教育者になりたい、あのような教育をしたい、という思いが燃え続けている」と言った「あのような教育者」「あのような教育」とは、その50年前に出会った藤井豁爾校長であり、岡山鬘での藤井校長のユニークな教育であった。⁽¹⁷⁾

4. 藤井豁爾と岡山鬘

太田俊雄は藤井豁爾について柴田俊太郎から次のように聞かされていた。

「旧岡山藩士藤井家には二人の兄弟息子があってなァ、この子どもたちを知るほどの者は、その才能、その伶俐さに舌をまいたもんだそうな。人々は『神童』というのは藤井家の坊ちゃんたちのようなのを言うのだろうか、とか、『あのお子たちは、いったいどげえな大人物になるじゃろうか』とか、いろいろわさしたもんだそうな。わけても、弟息子のほうがすごかったらしい。『お兄様の方は万一、関脇か小結ぐらいでおわるようなことがあっても、ご次男坊様の方はどうしてどうして、かならず横綱じゃ』ともうわさしとったそうな。その兄貴の方が、のちに日露戦争で旗艦三笠に乗り組んでいた名参謀藤井大佐だ（後の海軍大将）。弟の方が、内地はもちろん、朝鮮、台湾などで名校長として教育界に令名をとどろかせたが、思うところあって私財をなげ出して、われわれの学校である中学・岡山鬘を創立した。あんな教育者はめったにあるもんじゃあない。やっぱり兄貴の方は横綱にはなれなんだが、弟の方は立派に綱を張った。君たちの校長藤井豁爾先生はそういう大先生じゃ」⁽¹⁸⁾

藤井豁爾が私財を投げ打って創設した岡山鬘は、1909（明治42）年に私立閑谷鬘の岡山分校として岡山市広瀬町の私立岡山教員養成所を仮校舎として開校した。その後、1911（明治44）年に岡山市大供に校地を得て校舎を建築して移転。1913（大正2）年母校から分離独立して私立中学第二閑谷鬘と称したが、1914（大正3）年に私立中学岡山鬘と改称。

1918（大正7年）上道郡宇野村浜（現在、岡山市中区浜一丁目）に移転。開校3年目の1911年は学級数3、教員10人、定員200人のうち生徒数112人であった。藤井豁爾は閑谷巒と岡山巒の校長を兼務して経営にあたっていたようである。藤井校長が引退した後と思われるが、1932（昭和7）年と岡北中学校と改称したが、1933（昭和8）年7月に廃校となった。⁽¹⁹⁾

藤井校長が岡山巒を創立した詳細は定かではないが、その一つに考えられるのは、日清・日露戦争以後、第一次産業から第二次産業への産業構造の変動に伴い、経済活動が盛んになると共に旧制中学進学者が増大してきたことによる。岡山県では明治期には県立中学校がまだ少なかった。もう一つの理由は、江戸時代から二百年以上続いてきた岡山藩の庶民の教育の場であった閑谷巒の教育の伝統を継続・発展させようとする強い意思によるものと思われる。

閑谷巒は1870（明治3）年の学制改革の結果、岡山藩学校に合併され、1873年2月に再開するが、教師陣の移動などによって1877（明治10）年に閉校に追い込まれた。⁽²⁰⁾しかし、閑谷巒の環境と伝統を守ろうとする人々の熱意と地元の有志の協力の下で、1884（明治17）年に私立閑谷巒は再興された。そこでは、予科1年、本科3年で、英学、漢学、数学、兵式操練の4教科が教えられていたが、1893（明治26）年には倫理、地理、歴史の3教科が加わり、1895（明治28）年には朝鮮語、1900（明治33）年には物理、化学の教科が加わった。しかし、1902（明治35）年には、中学校令に準拠した教育を行なわざるをえなくなり（倫理、国語、国文法、漢文、英語、歴史、地理、数学、博物、理化、図画、習字）、校名も1903年には私立閑谷中学校と改称した。だが、翌年には私立閑谷巒と校名を戻した。定かではないが、藤井豁爾が閑谷巒の校長となったのは、この頃からではないかと推察する。1919（大正8）年には中学閑谷巒と改称するが、1921（大正10）年には県営に移管し、岡山県立閑谷中学校（現在の岡山県立和気閑谷高校）となり私学としての生命を終える。⁽²¹⁾

このように明治期から大正期にかけての閑谷巒の変遷を見て来ると、藤井豁爾が岡山巒を創立した目的が見えてくる。すなわち、閑谷巒の最後の校長が岡山巒を創立し、閑谷巒と岡山巒の校長を兼務し、その後には岡山巒の校長に専念したのは、県立に移管した後では消滅してしまう閑谷巒の教育理念を守り残そうとしたのである。言い換えれば、知識の教育も重要であるが、それと共に魂と魂の触れ合いによる人格的な陶冶による教育、人格教育、人間教育、全人教育の伝統を残そうとしたのである。

5. 閑谷巒・岡山藩学校の教育理念

岡山藩主池田光政の治世は江戸時代初期の1632（寛永9）年から50年間に亘るが、「治

国者不可不学也」として教育にも力を入れた。1669（寛文9）年に藩主や藩士のために岡山に岡山藩学校を開くばかりでなく、その翌年に和気郡木谷村に庶民にも開かれた閑谷巒を仮校舎で始め、3年後には建物も立ち上げて正式に開校した。これらの藩校の開設に密接に関わっていたのは、熊沢蕃山と池田光政によって学校御用に任命された蕃山の実弟の泉仲愛であった。1640（寛永18）年に岡山藩学校の前身である花畠教場が開設されたが、その教育方針は熊沢蕃山が著した「花園会約」の九つの定めめの冒頭に次のように記されている。

「…夫武士は民を育む守護なれば守護の徳なくしては不可叶。其徳の心にあるを仁義と云。天下の事業にあらはるゝを文武といふ。故に明にして慈愛あるは文徳也。明にして勇猛なるは武徳也。良知明なれば此徳素より我に備れり、今諸子の会約致良知を以宗とす。…」

教育の目的は第一に「良知」「致良知」と明記されている。「心の教育」の徳育である。知育と体育である「文武」は第二である。⁽²²⁾蕃山のこのような考えは、『大学或問』の十九の教育論で詳述されている。すなわち、「学校は文学（学問）の所なる。政といへるは何ぞ」と教育と政治の関係を問われて、次のように答える。

「学校は人道を教える所也。治国・平天下は心を正しくするを本とす。是政の第一なり。其上大君、諸侯を親しみ給ひ、父子のごとく兄弟のごとく心服するは、学校あるところによってなり。学校の師は、徳ありて理にくらかざる人を司とす。…」

学校で教えるのは文武よりも徳であり、自己修養によって心を修めて優れた徳を身につけ、その成果を政治の場にも用いることによって天下太平になる。教師に必要なのは、徳があつて理に通じていることで、そのような人がリーダーになる。⁽²³⁾

熊沢蕃山は閑谷巒の開講式で挨拶をしたが、このような趣旨の挨拶をしたのではないかと推察される。中江藤樹と熊沢蕃山の師弟関係は内村鑑三の『代表的日本人』によっても知られる。⁽²⁴⁾蕃山は同じ藤樹の弟子であった弟の泉仲愛ばかりでなく、⁽²⁵⁾父を亡くした藤樹の子どもたちにも岡山藩学校の教育にあたらせた。岡山藩学校と閑谷巒は、いわば本校と分校のような関係にあり、同じ教育理念に立っていた。その教育理念の背景にあつたのは、中江藤樹と熊沢蕃山の陽明学であった。

6. 中江藤樹の宗教教育思想

近江聖人と呼ばれた中江藤樹は日本で最初に陽明学を取り入れた儒学者であり、藤原惺窩や徳川封建体制を支えた林羅山ら林家による昌平巒（昌平坂学問所、明治維新後に大学南校を経て東京帝国大学の源流へと展開）という官学の朱子学の流れとは異なっていた。

藩校の中では朱子学派が主流であり、陽明学派は、中江藤樹と関係が深かった岡山藩を始めとして、愛媛の大洲藩、大分の竹田藩などで広まっていたに過ぎず少数派であった。⁽²⁶⁾ 藤樹は朱子学派を「俗儒」と呼び、陽明学派を「真儒」と呼んでいた。儒教は孔子と孟子の教えに基づいている。中江藤樹の人間観は「にんげんはみな善ばかりにして、悪なき本来の面目をよく観念すべし」⁽²⁷⁾ に表わされているように、孟子の性善説に立っていた。その主たる教えは朱子以来問題にされてきた「理」は、朱子学派の「性即理」という立場とは異なり、陽明学派の「心即理」という「心」に「理」があるという立場、すなわち「心学」にあった。ここから「理学」を中心にした朱子学派とは異なり、「理」と「心」が分離せず、知識と行動が一致する「知行合一」説が導かれる。さらに、生まれつき持っている良き知力である「良知」（心の本体である是非善悪を判断する能力）を実現すること、すなわち「致良知」が学問の目的、教育の目的であるとする。⁽²⁸⁾ やがて、中江藤樹の陽明学派は、大塩平八郎に影響を与え、さらに幕末の佐久間象山を経て吉田松陰らによる明治維新の立役者に影響を与えて行くことになる。

7. 太田俊雄と岡山覺・閑谷覺・岡山藩学校

以上、見てきたように、太田俊雄のキリスト教以前の精神的土壌ともいうべき宗教教育思想の一つの根を遡ると、岡山覺の藤井豁爾校長を経て、岡山覺の本校閑谷覺、閑谷覺の本校岡山藩学校の教育理念、すなわち中江藤樹と熊沢蕃山の陽明学の「心の教育」である「致良知」にまで遡ることを明らかにした。それは同時に、江戸時代から明治・大正期を経て現代にまで至る官学と私学の対立をその底流に孕んでいる系譜でもある。こうして鳥瞰してくると、太田俊雄が晩年まで江戸末期の陽明学者佐藤一斎の教育書『言志録』を愛読していた理由が明らかになってくるであろう。⁽²⁹⁾ このように学校教育を通して耕された一つの精神的土壌の上にキリスト教宗教教育思想が「接ぎ木」されたのである。

註

- (1) 山田耕太「太田俊雄の宗教教育思想（1）」『敬和学園大学人文社会科学研究所年報』第7号（2009年）、115-126頁。尚、その後、ホーレス・ブッシュネル『キリスト教養育』（森田美千代訳、教文館、2009年）が出版された。
- (2) 山田耕太「太田俊雄の宗教教育思想（2）」『敬和学園大学人文社会科学研究所年報』第9号（2011年）、1-10頁。
- (3) 山田耕太「太田俊雄の宗教教育思想（3）」『敬和学園大学人文社会科学研究所年報』第10号（2012年）、61-69頁。
- (4) 「市立岡山巒入学」（太田敬雄編・太田俊雄著『父との「新しき出会い」：太田俊雄召天10周年記念』開文社出版、1999年、ix頁「太田俊雄年表1925年3月～4月」）ではなく「私立岡山巒入学」である。
- (5) ローマ書11:24.
- (6) 太田俊雄「敬和」第122号（1979年6月「わが中学時代の思い出」）『太夫浜卓話』第2巻、241頁、「私はこの学校で、ほんとうにすぐれた真の教育者たちにふれたことを、生涯の大きな幸福であると思感謝している。若き日に、すぐれた人格と出会うことほど大きな幸福はない。藤井豁爾先生をはじめ、柴田俊太郎、岡田善太郎、大島オトツツァン（どうしても愛称しか思い出さない！）等々の諸先生」。
- (7) 太田俊雄『太夫浜卓話』第2巻、242頁。
- (8) 小川芳男『わたしはこうして英語を学んだ』TBSブリタニカ、1976年、20、22頁。
- (9) 太田俊雄「敬和」第5号（1968年1月「日本人の教育（2）」）『太夫浜卓話』第1巻、204頁。
- (10) 太田俊雄『矢と歌：師弟物語』（『敬和学園史レポート集成』No.16、2009年）118-119頁。
- (11) 太田俊雄『矢と歌』118-122頁。
- (12) 太田俊雄『矢と歌』122-129頁。
- (13) 太田俊雄『矢と歌』129-130頁、太田俊雄『後にのこるもの』（敬和学園史レポート集成、vol.19、2010年3月）85-86頁。
- (14) 太田俊雄「敬和」第152号（1982年1月「出会い」）『太夫浜卓話』第3巻、83-84頁、同『後にのこるもの』87頁。
- (15) 太田俊雄「敬和」第117号（1979年1月「ある不良生の軌跡」）『太夫浜卓話』第2巻、219-221頁。
- (16) 太田俊雄『後にのこるもの』89-93頁。
- (17) 太田俊雄『後に残るもの』84頁。
- (18) 太田俊雄『矢と歌』118頁。
- (19) 岡山県教育史刊行会『岡山縣教育史・下巻』日本教育新聞社、1961年（復刻版、山陽新聞社、1981年）、330、332-333、335頁。
- (20) 岡山縣教育會『岡山縣教育史・中巻』岡山縣教育會、1942年（復刻版、山陽新聞社、1981年）、131頁。
- (21) 岡山縣教育會『岡山縣教育史・中巻』456-462頁；岡山県教育史刊行会『岡山縣教育史・下巻』329-330頁。
- (22) 岡山縣教育會『岡山縣教育史・上巻』岡山縣教育會、1937年、38-101、196-211頁。
- (23) 後藤陽一・友枝龍太郎校注『日本思想史大系 熊沢蕃山』岩波書店、1971年、452頁。
- (24) 内村鑑三『代表的日本人』（鈴木範久訳、岩波文庫、1995年）では、「日本の旧約聖書」として、西郷隆盛（新日本の創設者）、上杉鷹山（封建領主）、二宮尊徳（農民聖者）、中江藤樹（村の先生）、日蓮上人（仏僧）の5人を取り挙げる。
- (25) 中江藤樹の弟子には、熊沢蕃山・泉仲愛の兄弟、中川貞良・謙叔の兄弟、大野了佐、中西常

慶、淵岡山がいた。

- (26) 笠井助治『近世藩校に於ける学統派の研究・下巻』吉川弘文館、1970（1982）年、1961-67頁。
- (27) 『翁問答』上巻の末。
- (28) 山井湧「陽明学の要点：王陽明の〈心即理〉〈知行合一〉〈致良知〉〈事上磨練〉」山井湧・山下龍二・加地伸行・尾藤正英校注『日本思想体系 中江藤樹』岩波書店、1974年、335-355頁。
- (29) 太田俊雄「敬和」第144号（1981年4月）「“新たなる力”の源泉」『太夫浜卓話』第3巻、55頁；「敬和」第160号（1982年10月）「学問のすすめ：高校生諸君におくる」『太夫浜卓話』第3巻、115頁。